

由良要塞

由良地区:兵庫県洲本市由良

友ヶ島地区:和歌山県和歌山市加太字苦ヶ沖島

加太・深山地区:和歌山県和歌山市深山

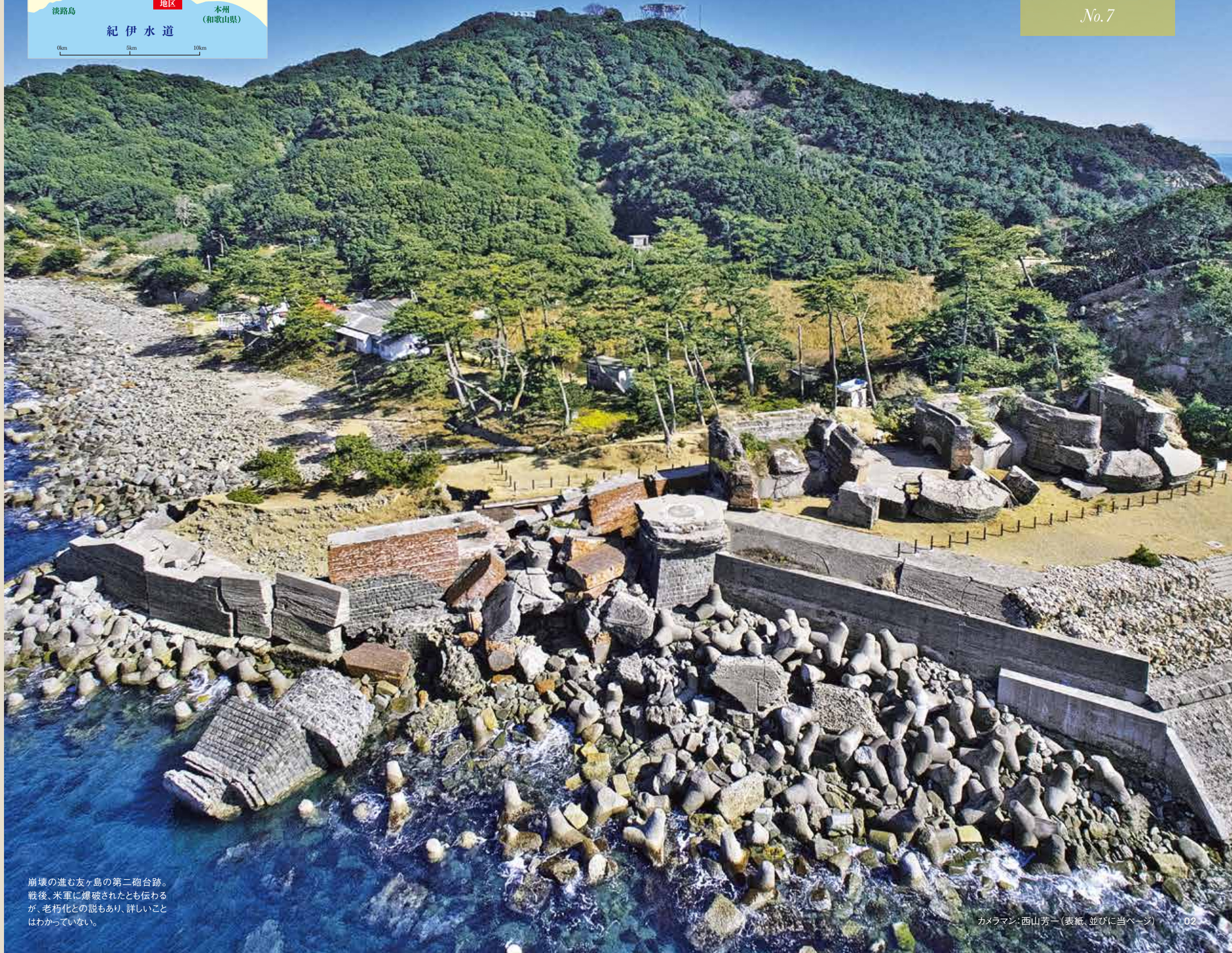
明治中期、日本は近代化の最中であって富国強兵を掲げ、帝国主義に邁進する。国防の重要性が増し、各地に軍事要塞、砲台の整備が進められた。大阪湾の玄関口にあたる淡路島の由良地区から本州側の和歌山市加太・深山地区にかけて築かれた「由良要塞」は、その代表的な防衛施設だ。大阪湾への欧米諸国の艦船の侵入阻止を目的として紀淡海峡の由良瀬戸、中ノ瀬戸、加太瀬戸を高所から睨むように、後に合併する鳴門要塞と合わせ約30の砲台、140を超える火砲が配備された。

要塞跡には砲台、弾薬庫、各施設をつなぐトンネル状の通路などが今も残されており、そのほとんどが煉瓦構造だ。煉瓦の製造は外国人技師の指導を仰いだと伝えられている。由良要塞の整備は明治22年、由良地区の第三砲台の建設に始まり、明治39年の加太・深山地区の火砲配備まで、17年の歳月をかけた国家プロジェクトだった。第二次世界大戦後、米国に接收、爆破処理された施設も多い。当時の軍事施設の諸元(仕様書等)は最高レベルの機密情報で、その設計、建設はすべて軍直轄で行われていた。終戦直後に処分された関連文書も多いことは容易に想像がつく。由良要塞の記録、資料も決して多くない。今後、保存整備が進む過程で、新たな事実が明らかになるかもしれない。



加太砲台跡(表紙写真、並びに上の写真)の周辺には遊歩道や解説パネルが整備され、散策コースになっている。円形の火砲台座やこれを包囲する直線的な擁壁など、煉瓦が醸す構造美、機能美を間近で体感することができる。この高度な要塞が一度も「実戦」で使われることがなかったことは感慨深いものがある。

由良要塞 位置関係図



崩壊の進む友ヶ島の第二砲台跡。戦後、米軍に爆破されたとも伝わるが、老朽化との説もあり、詳しいことはわかっていない。